

# Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

## Real-Action

気が付くと、目の前が真っ暗だった。それだけではない、周囲一帯全てが闇に包まれている。オレはここが一体どこなのか理解するよりも早く、全身を貫くような鋭い痛みで顔をゆがませ、身に起きている状況を確認した。

オレ・・・ジン・K・ジェイドは今現在、全身を冷たい鈍色の鎖で雁字搦めにされて空中に宙づり状態で拘束されていた。身動きは一切取れない、十字架に張付けられるかのように両腕が左右へ延ばされ指先まで細い鎖が絡みついている。両足も同様に、太い鎖でハムでも作るかのように縛り付けられていた。

拘束を解こうと身をよじるが鎖は動くたびに全身に食い込み痛みが増すばかりで一行に外れる様子が無い。次第に苛立ちが積りさらにむきになってさらに暴れるが、無情にも鎖がジャラジャラ鳴るばかりで進展は見られない

「貴様は負けたんだ」

目の前から聞き覚えのある声が聞こえた。ハッとなって向き直ると、すぐ正面によく知っている声の主が立っていた。

虎眼・・・彼がそこにいた。それだけではない、虎眼の後ろから続くように猫眼、アゲート、コルト、ドクター、ジェットが順々に闇の中から姿を現した。

「ようテメエらか、生きててよかったじゃねえか。さっそくで悪りいだけこの鎖といてくれな  
いか？」

ジンは一行の無事を確認すると、悠長にそんなことを頼んだ。へらへらと笑いながら体を揺らし、半分遊ぶように体を前後に揺さぶっている。

しかし、そんなジンの行動に誰もリアクションはしなかった。明らかに様子がおかしい・・・皆一様にドクターのように顔の半分に濃い影を落として顔半分が見えなくなっているのに気が付いた。全員笑みひとつない、ドクターもいつものように歯を剥き出しにして怪しげに笑むことも無い、普段からやかましいアゲートも何一つ発言をしない。

何か違う、さすがにそう思ったジンはふざけるのをやめて鎖で縛られたままその場で静止して一行を見直した。

「・・・テメエら？」

「メガネ君、小生達は死んだんだ」

「アタシらはテメエのせいで死んだ」

「あんたがあの時余計なことをしてグスタフを挑発したからさ」

「落とし前どうつけてくれるヨ？」

「ボクもあの時余計なことをしなければよかったと後悔してますよジンさん」

「貴様は負けた・・・そして俺たちも皆貴様のせいで・・・死んだ」

一行は突然そんなことを言い始めた。当然ジンは何のことを言っているのかさっぱりわからない。  
。

死んだ・・・負けた・・・グスタフ・・・俺の・・・せい・・・？

訳が分からない、何を言っているのかわからない、そもそもなんでオレはこんなところで拘束されてんだ？なんであいつらはあんなことを言っているんだ？

分からない・・・わからない・・・ワカラナイ・・・

「貴様のせいで俺達は死んだんだよ、ジン。見ろ・・・俺達のなれの果てを」

そう言いだすと、虎眼は自らの腕に触れた途端・・・突如両腕がその場でもげ落ちた。それだけでなく、虎眼の両脚も膝から下が朽木のように呆気なく折れ、その場に倒れてしまった。虎眼だけに留まらない、アゲートは全身が大量の刃物で串刺しにされ血を吹き出し、ジェットと猫眼は全身から炎が燃え盛り、全身を真っ黒に焼け焦げされる。ドクターは首が胴体から分離し、独立した頭が足元に落下し、コルトはあらゆる関節があらゆる方向に折れ曲がり切開した腹から血まみれの内臓が飛び出してきた。

とんでもないものを見てしまったジンは、人生で一度も感じたことの無い恐怖におびえ一瞬息のみ、全身から鳥肌が立ち、そして思わず現実と自分の目を疑った。

その瞬間フラッシュバックのように思い出す、自分が取った行動を・・・。

あの時グスタフと対決をするために一人だけ居残りし喧嘩を吹っ掛けた拳句惨敗を期し、その直後に連中も襲われた。

今の連中の姿は、グスタフに殺された後の姿なのだった。

「あんたのせいで死んださ」

「テメエのせいで死んだ」

「君のせいで死んだ」

「貴様のせいで死んだ」

「お前のせいで死んだ」

「あなたのせいで死にました」

死体と化した一行は口々にそうつぶやき、身動きの取れないジンの元へ近づき始めた。墓の中から蘇ったゾンビのように、両腕を突き出し、目の前の餌に群がるように・・・。

ジンは顔面を青ざめさせ、呼吸を忘れてしまうほどの恐怖に声も出なくなっている。やがてコルトがジンの右腕を掴んだ瞬間、ジンの右腕がガラス細工のようにバラバラになって碎け散った。痛みは一切ない・・・その代わりに、今以上の凄まじい恐怖と絶望感が全身を駆け巡り、ジンの目から一筋の涙がこぼれた。

当然これだけでは終わらない、アゲートが左足を掴んだとたん右腕同様に足が碎け散った。猫眼がジンの腹めがけて手を突き刺すと、ジンの腹の中から内臓を掻き出し始めた。ジェットが腰に触れると全身を焼いている火が燃え移り服が焼け、身を激しく焼け焦がした。

次々に全身がボロボロになってゆく、死体に自分が死体になっていく果てしない恐怖、痛みをは

るかに上回る絶望感、崩れ落ちる肉体・・・ジンは奥歯をガチガチ鳴らしながら泣きじゃくり、喉の奥からようやく出てきた言葉を発する。

「ち・・・違・・・う・・・俺はお前らを・・・お前らを！」

「あんたのせいで死んださ あんたがオレっちを殺したさ」

「テメエのせいで死んだ テメエがアタシを殺した」

「君のせいで死んだ 君が小生を殺した」

「貴様のせいで死んだ 貴様が俺を殺した」

「お前のせいで死んだ お前が私を殺した」

「あなたのせいで死にました あなたが僕を殺した」

「あんたがオレっちを殺したさ」

「テメエがアタシを殺した」

「君が小生を殺した」

「貴様が俺を殺した」

「お前が私を殺した」

「あなたが僕を殺した」

「あんたがオレっちを殺したさ」

「テメエがアタシを殺した」

「君が小生を殺した」

「貴様が俺を殺した」

「お前が私を殺した」

「あなたが僕を殺した」

「あんたがオレっちを殺したさ」

「テメエがアタシを殺した」

「君が小生を殺した」

「貴様が俺を殺した」

「お前が私を殺した」

「あなたが僕を殺した」

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した





「んんん・・・グガァァァァ・・・グガァァァァ・・・」

突如ジンのすぐ近くから凄まじく耳障りなイビキが聞こえてきた。音源はすぐ右わき、首だけを回して確認してみると・・・そこには意外な人物がいびきをかいて眠り惚けていた。

アゲートだった。椅子に座ったアゲートが首を傾けながら器用に座ったまま寝ていた。当然夢で見た時とは違い、全身を刃物で貫かれたりなどしていない。ただし病人用の簡素な服の内側からは包帯が覗き、腕には点滴の針が刺さっている。頭にもトレードマークであるバンダナの代わりに真っ白い包帯がぐるぐる巻きにされている。

それだけではない。暗闇に目が慣れ始めてよ～く辺りを見回してみると、アゲート以外のメンツ全員がそこに集結していた。床に腰を下ろして眠り惚けるジェット、一つのベッドを共有して使っているドクターと猫眼、左腕を首からぶら下げ壁にもたれて立ったまま寝ている虎眼、枕と脚の方向が全くの逆向きになったままベッドで寝ているコルト。

皆寝ている・・・そしてみんな生きている。夢で見たものはあくまでも夢、こちらが正しい現実。自身を含め7人全員が生存していたことを知ると、ジンは思わず笑いたくなくなってしまった。まさか変な夢を見て恐怖し、飛び起きてしまったところをこいつらの誰かに見られでもした日には一生笑いのネタにされかねない。

そうならなかったことによる安心感と、自分のそんな情けなさが同時に襲いかかり・・・逆に笑いたくなくなってしまったのだった。

しかし今連中は全員寝ている、ここで起こすわけにもいかないので必死に声に出してしまいそうな笑いを押し殺し、ジンは再びベッドの中に潜った。

何と言うか、あれだ。

何かもう・・・面倒くせえ。

ジャーキングと言う現象を知っているだろうか？人は無意識のうちに体に負担がかかるような無理な体制で眠っていると突然体がビクンッ！と跳ね上がって目が覚めてしまうあの現象の事である。食べ放題の料理バイキングで両手に皿を持ってさっそく料理を取りに行こうとしたら、突然落とし穴に落ちてしまう夢を見たアゲートはそのジャーキング現象が発症し、首が一瞬ガクンッと落ちた直後にゆっくり目を覚ました。

口元からよだれをたらし、今起こった現象の一切が架空の夢であることをたっぷり10秒も使って理解すると、大きなあくびと共に両腕を伸ばして背筋を伸ばした。腕に点滴の針が刺さったままなのを思い出しチクッと痺れるような痛みで意識がはっきりしだすと、今度は急に腹の虫が豪快に鳴りだした。起床直後だというのに、忙しの無い体である。

「ファァァァ・・・よく寝たら腹減ったさ。今何時だっけ？」

「7時35分、朝飯にするならオレの分も頼む」

「あいさ～、オレっちトンカツにするけど何食べるさ？」

「朝から腹に重すぎるだろバカ、軽めにトーストでも食いたいな」

「オレっち朝からパンなんて腹に溜まんないからあんま好きじゃないさ～・・・ん？」

両目をこすりながらナチュラルに会話をしていた府がここでようやく違和感に気が付いた。アゲートは今、誰と会話をしていたのか？

視界の晴れた両目で声の主を確認すると、そいつはベッドの上で上半身を起こし器用に右手一本で見つけた新聞を読みながらタバコを一本加えている。

一瞬、アゲートはその男が誰なのか判断するのに困惑した。しかしその彼が・・・ジンが煙を吐き出しながらアゲートの方へ向き直り一言、「よう」と呟いた直後、アゲートの目玉が宝石のような輝きを放った。

そして何を思ったか・・・飛びついてきた。

「ジンンンンンンンン！！！！」

「ギャァァァァァァァァ！！何しやがんだコラァァァァ！！！！」

骨は砕け、内臓も破損し治療の傷も全く癒えていないジンの体に、アゲートは何も考えずに両腕を力強く・・・もう一度言おう、力強く巻きつけてきたのだった。当然本人は激痛のせいで呼吸が止まりかけ両眼から涙が噴き出しそうになったが、これは何とか堪え代わりにガラにもない悲鳴を上げた。

「ギャァァァァァァァァァ痛てえええええええええええええええええ！！！！！！！！」

「ジンが目を覚ましたさああああ！！良かったさああああああああ！！良かったさああああ！！」

痛みに悶える当人の気持ちなど一切考えていないアゲートの抱擁はその流れ落ちる涙の量に比例して次第に圧力を強める一方だった。

何が楽しくてこんな嫌がらせにも等しい行為をしてくるのか一向にわからないジンは、あっという間にキレた。

「痛いっつってんだろうがこのダボハゼがああああああああ  
ああ！！！！！！」

ジンの怒りの裏拳が正確にアゲートの顔面をとらえた。腕を振り抜くとアゲートは一直線に壁へ向かって飛んでいき、頭半分をコンクリート製の壁に埋め込ませてようやく動きが止まった。そのはずみで頭に巻かれた包帯からなんか赤い汁が滲み出しているが、ジンは一切気にしないことにした。

それどころか今の一撃で全身の傷が一斉に悲鳴を上げてジンに耐えがたい激痛を与え、脂汗が流れるほど悶絶したジンは痛みに耐えるように右手の新聞紙を握りしめつつ歯を食いしばった。朝からいきなりドタバタ煩く騒ぐもんだから、他の連中もうるさくて順々に目を覚まし始めた。そして皆一様に壁に突っ込んだアゲートなど眼中にもせず目の前でうずくまっているジンを見て全員目を丸くしている。あの虎眼ですらジンが目を覚ましているところを見て明らかに仰天したように両目を剥いてこちらを見ていた。

「痛ってててて、響くう・・・骨が、全身が」

「ジン、貴様本当にもう起きているのか？」

「今オレがご臨終しているように見えるならそうなんじゃねえの？ああ、マジ痛えし」

「いや・・・いやいやいやいやいやいや、だってジンさんて確か・・・そうですよねジェットさん？」

「おかしいなあ、記憶が違ったはずねえんだけど？どうなってんだドクター」

「もう起きてるシ、話が違うネ」

「キッシッシッシッシ、キミは本当に困った人だねえメガネ君」

「ああ？」

一行が何のことを話しているのか皆目見当もつかず、ジンは頭の上に多くの？を浮かべて連中を見回した。ちなみにこの時ジンの視界にはもうアゲートの姿はない。

全員が生きていたことに関しては御の字だが、何しろ今が一体どういう状況になっているのか全く分からないジンの為に、皆が一斉に今までの説明を離し始めた。部分部分で情報に誤差があったり不必要なくらい内容が過大になったりまったく関係のない話も飛んで来たり、途中からもう訳が分からなくなったので6人の話を一つにまとめると以下のようなになった。

グスタフとの決着後、ジンはダイヤモンドを回収しそれを倒れているドクター達の前まで持って行くと、腹が立つようなドヤ顔を披露した直後身にまとっていた全ての魔力の装備が解除され、元の傷だらけのボロ雑巾姿に戻った。当然そのままジンは卒倒し、傷口から大量の血を流して意識も飛んだ。

事態を重く見たドクターは気力を振り絞りジンの肉体を緊急応急処置を施すとジェットに相談を持ちかけた。

曰く、このままではジンは確実に死んでしまうので今すぐに町の病院に担ぎ込み手術をしなくてはならないとのことだ。一目見ただけでそれくらい理解できるが、なぜそんなことをジェットに相談したのか尋ねると、ジェットがこの半死体を担いで最寄りの病院まで飛んで運んでほしいとのことだ。

当然最初は無理だと言ったが医者としての魂が爆発しているドクターは無理やりにでも実行に移そうとした。

ジェットの飛行に必要な魔力はドクターの所有していたを金剛杵を拝借して魔力を一時的に増幅、飛行可能までにさせ全てをジェットに委託した。

仕方なくなったジェットは渋々特急便の配達を承諾するとこの場から一番近い病院へ・・・不本意な結果ではあったが仕方なく最も近くにある大きな病院のある街へ・・・忌々しいあのフェア・ツェリザカ軍の本拠地アーウェンへ向かい全速力で飛んで行った。

全ての魔力を総動員させ、いまだかつて出したことの無い全速力で飛べば、20分ほどでアーウェンに到着することができた。

街の中を突っ切り、考えうる限り最も高い技術を持つ医者がある病院へ・・・フェア軍の本部へと急いだ。途中軍の人間に見つかって発砲もされたがいちいち気にしている余裕も無く弾雨の中を傷つきながら疾走。間もなくフェア軍本部の玄関前まで到着した直後にジェットの魔力が完全に底を突き、門をくぐるより先に地面の上に不時着し半死体共々転がり落ちたのだった。

目を回しながら気絶しそうにもなったがそれどころではなく、急いで杖とジンを肩に担いで中に入ろうとしたら案の定フェアの兵隊に囲まれて身動きが取れなくなった。

自分たちにはまだ射殺命令が下ったままらしく、発見し次第発砲が許可されているとか・・・その命令は当然グスタフが生前から通達させている命令だった。目の前に立っているのが死体を担いだ無力な女一人だと思っている兵隊共は皆一様に勝者の余裕の笑みを浮かべながら銃口を向けている、完全に舐めきっている。その直後にジェットはキレた。

肩に担いだ人をその場に転がし叫んだ。

「テメエらいつまで下らねえ犬のマネなんかしているつもりだ！！テメエらのご主人様はもう死んだ！！ここに転がってるメガネが切り刻んで殺したんだ！！テメエら全員の飼い主は死んだんだ、もう命令に従う理由はねえんじゃねえのかよ駄犬野郎共が！！いい加減にしやがれってんだよこんのストコドッコイのヒョーロク玉！！！」

こんな言葉が通じないことぐらい知っている、だが叫ばずにはいられなかった。死んだ人間の言うことをいつまでも忠実に守ろうとするこの連中が哀れに見えた、まるで人形のように見えた。ならばせめて信じてもらえなからうがテメエら人形を操ってる糸が切れて、自由になったことだけでも伝えたかった。

どうせ死ぬならこんな人形みたいではなく、胸張って人間として死んでやる。ドクターの頼みは聞いてやれなかったの最大の心残りだが、仕方なしと思いながらジェットは肩を大きく上下させながら叫びあげた。殺すなら殺せ人形共。

だが真実は漫画より奇なり、予想に反する行動を人形共は取った。一瞬ざわついて人形共が隣に立っている人形と顔を合わせて何かつぶやき始めると、徐々に銃口の狙いがそれてジェットを狙わず地面に向けるようになり、中には銃を手放すものも数人現れた。

何が起こったのかよく分からないが、人形共は突然発砲をやめたのだ。何が起こったのかよく分からないまま突っ立っていると、銃を捨てた一人の人形がジェットの前まで歩いてきてグスタフが死んだことを改めて確認するように問いかけた。誰がどのようにして殺したのか細かくジェットが説明すると、人形たちは一斉に行動をとった。

一人残らず全員銃をその場に捨てると、数人が死にかけているジンを新調に担ぎあげて建物内に運び込んだのだった。一人の男はポケットから通信機を取り出し仲間に関係を連絡し始め、ジェットに問いかけた兵士は突然腰の高さまで頭を下げてジェットを建物内の医務室に案内した。

急激な態度の変化に戸惑いを一切隠せないジェットは何が何だかわからないまま医務室で治療を受けると、まだ仲間が砂漠の向こうに取り残されていることを説明する。すると兵士たちは意気揚々と数台のトラックを走らせ、赤十字の旗を掲げて砂漠へ出向きドクター達の救出へ向かったのだった。

何でいきなりこのようなことになったのか全く理解できないままジェットはその後眠りについた。魔力の消費で体力的にも精神的にも疲労が限界を迎え脳が電源を落としたのだ。

それからさらに1時間後、砂漠で救出された残りの一行は車内で傷の応急処置を受けると全員もれなく手術室に担ぎ込まれ緊急手術開始、全員落としかけた命をあるうことかフェイファー軍の人形たちに救われたのだった。

特にジンの事だが、ジンの傷の大きさは異常の極みであつたらしく治療には医者十人がかりで丸一日かけて手術を終え、命を繋いだそうな。処置の際強い麻酔を大量に使つたらしく治療には成功したが目を覚ますのにはそれから三日はかかると判断されていた。

しかしそれからジンはあるうことか手術を終えた翌日に目を覚ましたのだった。一行はこれに驚かされておりあのような人間ではない何かを見るような目でジンを評価した、と言うわけだ。

「ってことは、あれからオレ達は二日たってるってことか」

「そう言うことだね。小生達を治療してくれた先生たちも驚いていたよ、小生達の生命力の強さにね」

「生命力と言うより、むしろ生に対する執着心・・・しぶとさに感心したってところだろう」

「何はともあれ全員生き残っていただけでよかったです、ハイ」

状況を飲み込み、気持ちに落ち着きが生まれた途端全員の顔をほころびだした。アゲートと猫眼とコルトが顔を合わせてながら大口を開いて笑い、ジェットと虎眼がやれやれと言った顔で苦笑いし、ドクターは相変わらずあのキシシとした奇笑を浮かべている。全員ここにいる、全員生きている、それだけは間違いない。釣られてジンも眉を八の字にしながら笑った。

「笑い話はこの辺にしておいて、そろそろ今後の話でもしたいのだが・・・いいか？」

真っ先に興が覚めて思考が現実的なものに戻った虎眼がジンへ視線を向けてそう言ってきた。視線の先にはジンの失われた四肢が映っている。

「ジン・・・貴様はこれからどうするつもりだ？」

「・・・どうってのは？」

「貴様の今後の処遇についてだ。ハッキリ言えばこのまま旅を続けるか否か、それを決定してもらいたい」

誰もが考えていても口にできなかったことを、虎眼はズパッと言い放った。その質問が飛んできたとたん誰もが口を閉ざし、思わず視線をずらし俯いてしまう。ジンも例外に漏れず、一瞬でさっきまでの笑顔が消え去り自分の体を見やってしまった。

自分は頑固な性格であることは知っているつもりだ。故に一度自分で決めたルール・・・「やり始めたことは最後までやり遂げる」という自分の中の法律を決して破りたくないという気持ちは今も心の中にはある。しかし今のこの体たらく・・・旅どころか今となっては車いす無しでは移動もできず、ドラゴンとの喧嘩以前に刀もまともに握ることはできない。生活も誰かの補助なしにはできないことだろう、つまり今の自分は完全なる無力、戦力外、邪魔、荷物、足手まといでしかない。そんな野郎がテメーのルール語ってみんなの足引っ張ったりなんかしたら目も当てられない笑い者以下の存在になってしまうのは明々白々・・・。

しばらくの間沈黙は続き、部屋の中には時計と7人分の呼吸音以外何も聞こえなくなっていた。どんなに深く考えようが、ジンの選択肢は一つしかない。分かりきっていたことだ。自分のルール曲げんのだけが気に入らないがそういうことを言われる立場ではない。

決心したジンは胸の中にため込んだ空気を一気に吐き出しながら、片眉を軽く上ずらせ答えを出した。

「オレはここで降りる・・・」

国王から課せられた仕事を、怪我を理由に辞退。何とも情けない話であるが仕方ない。足手まといになるくらいならいっその後腐れなくチャッチャと消えてしまった方がよっぽど得策である。そう割り切るしかなかった。

ジンの苦渋の決断に皆が戸惑いを隠せず、それでいて分かりきっていた答えの提示にどう反応してやったらいいのかわからず、結局全員何も言うことができず一様に目を閉じて現実を受け止めている。

自分たちの命を救ってくれた恩人が自分たちのために旅をやめる、聞こえのいい答えではない。やるせない気持ちでいっぱいなのは全員同じことだった。

質問をぶつけた虎眼本人も大きくため息をつく、壁にもたれてそのまま何も言わなくなって



しまった。自分をもっと強ければ全く違う結末になっていたのではないかとばかり考えてしまい、自らの弱さに苛立ちを覚えダイヤモンドの力の前に無力だった自分を恥じている。元々は他人であるはずのコルトも何か考えるところがあるようで、ジンを助けた張本人として自分がやったことが本当に正解だったのか疑問がわいてくる。

どうしようもない空気が室内に充満し始めた時、ノックも無しに突然ドアが力強く開かれその空気を換気するために一人の男が現れた。

「話は全て聞かせていただきましたぞ！！」

「「「「「「「ビックリした  
ああ！！！！」」」」」」」」」」」

部屋の外からすべての話を盗み聞き・・・もとい、偶然立ち聞きしていたらしく、男は全ての現状を把握しているようだった。

「目が覚めた様で何よりですなMr. ジェイド、私はこの組織内で中将を務めていますステアーと申します。さっそくですがMr. ジェイド、私にいい案がありますぞ！」

部屋に入って来るなりハイテンションな初老の中将は、手に握っていた紙筒を広げてジンの目の前へ差し出した。丸まった紙を自分で広げてみるができなかつたので代わりにドクターが両手で広げると、皆がジンのベッドの真ん中に集まり紙束を凝視した。

それは設計図だった。機械に関して詳しいことは専門外なのでサッパリわからないが、そこに書かれていたのは何かの機械の設計図で間違いなさそうだ。数枚のうち半分は機械の腕の図面、もう半分が足の図面である。

それが何を意味しているのかほとんどのメンツは分からなかつたが、ドクターだけがこれを見て何かを閃いたようだった。

「・・・もしかしてステアー殿、これはまさか？」

「その通り、これはファイアー軍で研究中の生体コネクターを用いた鋼鉄製の人工四肢、即ち機械の技手と義足の設計図です」

人工四肢・・・義手、義足・・・それならドクター以外の6人にも理解できた。

義手とは本来木や骨、プラスチックや金属などを用いて作られた偽物疑似肉体。偏見な物見をすればそこにあたかも無いはずの腕があるかのように見せることができる偽物の身体。それさえあれば確かにこのままでいるより遥かに楽な生活を送ることが可能だろうが、気になるのは生体何とかだとか機械の技手だとか、専門的な部分がまだ理解できない。

「なるほど、機械を使った義肢かい・・・」

「そうです。サイボーグ兵製造の際に提唱された新たな技術で、全身を機械に改造するサイボーグ

と違いこれは部分的な肉体の機械化・兵装が可能となる技術です。肉体との拒絶反応の少ないチタン合金をメインとした生体コネクターには光ファイバーを用いて体内の神経と接続、接合させた義肢に直接ダイレクトにシンクロさせることにより限りなくオリジナルと変わらない感覚を持たせることができます。唯一問題になるとすればこの義肢を装着した際肉体にかかる重量の負荷なのですが・・・あれ？」

自ら持ってきた設計図を指さしながら細かく説明するのに夢中になり過ぎるあまり、ステアーは周囲に全く気が付かなかった。故に今になってみると、全員目を点にして話が右から左に流れて全く頭に入ってこないでいた。

要するに何のことを説明しているのかぜ～んぜん分からないのだ！

「・・・・・・・・ゴホンッ！分かりやすく言いますとこの義肢は普通の義肢と違い、自分の意志で自在に動かすことができ、機械であるにもかかわらず感触をそのまま持つことができるのです！柔らかいとか硬いとか熱いとか冷たいとか、触った感覚がそのまま脳に伝わるのです！」

「「「「「「・・・・・・・・おおおお！！」」」」」」」」

やっと理解してくれた様で、ステアーはホッと胸をなでおろした。

「擬似的なものではなく、あくまで新しい身体って訳かい・・・・・・・・そいつはいいねえ」

「よかったですねジンさん、これなら旅をやめる必要もなくなるんじゃないんですか？」

「かもしれないけどよ・・・・・・・・でもいいのか、そんな凄そうなものオレに？」

「Mr. ジェイド、あなたはこのシーバルーの黒歴史に光をもたらしてくれた救世主です。そのためのお礼となるならば私たちにできる全ての力をあなたたちに捧げる所存！お礼を言うのは私たちの方ですとも」

ステアーは満面の笑みでジンにそう言うと、なんだか申し訳なさそうな表情を浮かべて軽く頭を下げながら聞き取りづらい小声で礼を言った。

新しい身体が手に入る・・・・・・・・これ以上今のジンに臨むことが無い最高のお礼である。ならば甘んじて受けよう・・・・・・・・改めて自分の意思を固めてステアーからの提案を承諾すると、さっそく準備に取り掛かると言ってステアーは出て行ってしまった。

部屋の中に充満していた重苦しい空気はもうどこにもない、新たな希望を見出した一行は安堵し再び和やかな笑みが浮かぶ。

当然この時は、これから襲い来る敵の存在になど全く気がついてなどいなかった。

場所は変わってここは資料室、今までの研究成果のレポートや戦争を起こした時に戦歴や被害報告書から兵の個人情報まであらゆる情報をかき集め収納している部屋である。

一人の兵士が部屋の鍵を開けて中に入ると、内側から新たに鍵をかけ直して誰も入れないように施錠した。室内に誰もいないことを確認すると、兵士は真っ先に人体実験等の結果をまとめたレポート欄のある棚へ走った。資料には一切目もくれず、兵士は棚の中のファイルではなくその場にしゃがみ床を指でいじり始める。埃と砂を払いのけると随分前から用意していた物を取り出すための鍵穴を発見する。

兵士は胸ポケットの中から一本の鍵を取り出すと迷いなく鍵穴へ挿入、一回転させると内側からカシャンッと鍵の外れる音が聞こえた。

兵士はニヤリと笑み鍵ごと床板を引っ張り上げると、50cm四方の床板が外れ中から今まで使いたくとも使う機会が無く埃にまみれていたそれを持ち上げる。

それは非常用の通信機、音ではなく機体内に備え付けられた小さなハンマーとリズムよく叩き電波信号をある場所へ伝えるのだった。いわゆるモールス信号、数十年前にすたれた全時代の通信機ではあるが今だ現役、機械はしっかりと働いてくれた。

ツーツー、トントン、ツートンツーツー・・・

伝えるべき信号を送り終わると兵士は再び通信機を穴の中に放り込み鍵をかけた。そして何食わぬ顔で資料室を後にするとこれから起ころうとする出来事を想像してまたも笑みが浮かんでしまった。

ちなみに送った信号の内容はこうだ。

「ホウコクスカールグスタフノシカクテイセメルハイマゾ」

↓

「ほうこくす カールグスタフのしかくてい せめるはいまぞ」

↓

「報告す カール・グスタフの死確定 攻めるは今ぞ」

嵐はまだ、当分止みそうにない。

続

## おまけ キャラクター詳細

---

名前 コンバット・ベルグマン

年齢／性別 22／♂

誕生日 12月30日（山羊座）

誕生石 ターコイズ（成功、繁栄、不屈）

レベル 55

性格 おっとり、世話好き

職業 ガンナー

装備品 黒いスーツ、S&W M19、spas12、M79グレネードランチャー  
Cz75、GEM134、モーゼルKar98k、ファイティングナイフ

好物 安全、平穩、野菜料理

嫌物 変化、炭酸飲料

眼／髪 紫、糸目、タレ目／蒼、長髪

身体的特徴 長身瘦躯、ニット帽愛用

イメージカラー 水色

イメージ楽器 フルート

備考 非戦闘向けの性格をしているが生きるために射撃技術を身に着けている

基本的に世話好きで平和主義、主夫

大きな隠し事あり

希望CV 緒方恵美 白永翼 佐藤ゆうこ